

# 上野の杜の 波瀾 万丈

## 第十八回 最終回に寄せて

東京美術学校から東京藝術大学美術学部へ、東京音楽学校から同音楽学部へ。  
近代日本の芸術教育と芸術研究を支えた二つの道筋。

近代美術教育と美術学校

連載終了にあたって

吉田千鶴子

「上野の杜の波瀾万丈」シリーズが終了します。私は美術関連事項を担当し、思い付くままテーマを選んで計九篇を寄稿しました。最初に「美校騒動」と題して明治三十一年の岡倉天心校長失脚について書いたのは、既定の本シリーズタイトル「波瀾万丈」に対応したためですが、これほど天心研究が進んでいるのに、いまだに騒動の原因が天心の専横さや私行にあったとされ、ゴシップのみが面白可笑しく語られているのを見て義憤を感じ、根本の原因は政府（文部省）の方針にあったことを知って欲しかったためでもあります。

第二回目的の「美校の経営戦略・依頼製作事業」は、天心が美校の運営をできるだけ理想に

近づけるため、既定の学校経費のほか民間資本・公的資金を導入して依頼製作事業を開始し、

皇居前広場の楠木正成銅像や上野公園の西郷隆盛銅像、博多の日蓮上人銅像、海外博覧会への政府出品物などの製作、古美術名品の模写・模刻等々を行い、それらを教員・生徒たちに担当させることによって研究・教育の充実を図ったこと。その事業が第二次大戦の時期まで続いて四六六件にも上ることを紹介しました。天心は文部省の意向を測ることもなく事業を開始し、実績を上げ、制度化してしまつたのです。

第三回目的の「紅一点」は美校が昭和二十一年の男女共学実施前は男子校で、例外的に少数の外国人女性を受け入れただけであり、きちんと卒業したのはマリー・イーストレーキただ一人だったこと、およびその原因などについて書きました。美校が東京音楽学校のように最初から男女共学だったら日本の近代美術はどうなっていたか。その点は何ともいえませんが、才能豊かで意欲に満ちた女性が制度のために最も環境

の整った学校で学んで成長することができなかったとすれば、実に惜しいことです。

第四回目的の「中国人・斉帰国」では、美校には外国人留学生計二三九人（中国一〇三人、朝鮮八九人、台湾三〇人、その他一七人）が在学し、日本人に混じって勉強していましたが、一九三七年の日中戦争開始により諸分野の中国人留学生たちが一斉帰国した際に帰国を余儀なくされ、その後交流が途絶えてしまつたことを紹介しました。このことと、美校と中国美術界の間で培われてきた交流活動にも終止符が打たれてしまつたことは、戦争がもたらした大きな損失の一つです。近年、近隣諸国で近代美術の研究が活発化し、日本留学生たちの果たした役割の大きさが明らかになってきている状況に鑑みて、一層そのことを痛感させられます。

第五回目的の「戦中の教官総辞職」は、一九四四年に文部省が断行した美校教官総入れ替え事件を採り上げ、決戦体制・非常時下に行われた「改革」が美校に何をもたらしたかを考えてみよう

としたものです。

第六、七回目的の「日本美術の保護」では、本学において今日重要な部位を占める文化財保護の研究・教育分野の淵源について記し、第八回目的の「作品展示施設の昔」では美校開校以後藝大大学美術館開館前までの展示施設の変遷を辿ってみました。第九回目的の「サールナートの壁画」では、美校・藝大の歴史を語る際におよそ話題に上ることのない、野生司香雪という卒業生のインドにおける壁画制作の快挙を採り上げました。このような活躍の事例は数限りなくあり、美術史や美術教育、文学、ジャーナリズムその他種々の分野で意義深い活動をした人々などについても紹介してみたいところですが、いざ書くとなると下調べが結構大変なので、この辺で筆を擱きます。

（よしだ・ちづこ／総合芸術アーカイブセンター特別研究員・美術学部教育資料編纂室）

## 音楽取調掛〈東京音楽学校〉 音楽学部

来し方百三十五年を振り返って

橋本久美子

この連載で取り上げたのは、明治二十年代前半から終戦直前までの六テーマである。ここから見えてくる東京音楽学校とはどのような学校なのだろうか。

- 一、東京音楽学校存廃論争
- 二、歌劇《オルフォイス》上演
- 三、プリングスハイムの時代
- 四、上野児童音楽学園
- 五、東京音楽学校生の陸軍音楽隊入隊  
(前篇・後篇)
- 六、東京音楽学校邦楽科への長い道のり  
(前篇・後篇)

創立早々、学校は国家予算削減のあおりで存廃の危機に揺れた。

帝大生の間にワグナー熱が高まっていた明治三十六年、歌劇研究会は教員等の協力のもとゲルック作曲《オルフォイス》を上演し、本科三年の三浦環等が注目を浴びた。再演計画もあったが、男女生徒が同じ舞台に立つことが風紀上問題視され、中止となった。

半世紀にわたりパッサ、モーツァルト、ベートーヴェンなどを中心に演奏してきた東京音楽学校管弦楽団を一気に欧米楽壇のレベルに引き上げようとしたのが、クラウス・プリングスハイムである。マラー、ブルックナー、ストラヴィンスキーなどの近現代曲に挑戦した。しか

しユダヤ系の看板指揮者は昭和十二年に契約を打ち切られた。

昭和八年、時代に先がけて始めた音楽の早期教育機関である上野児童音楽学園は四倍の難関で、砂原美智子、園田高弘、中田喜直等を輩出。マラーの《第三交響曲》の児童合唱ではドイツ語の暗譜で熱唱した。が、昭和十九年秋、戦局の悪化により閉鎖された。

昭和十九年秋、入営適齢の生徒十四名が陸軍戸山学校軍楽隊に入隊した。少しでも音楽の勉強を続けさせる方途であった。同校は在校生の

戦死者を出さなかった。

邦楽科は、唯一の国立音楽学校の「顔」として欠くべからざる存在である。家元制度や流派等の伝統を持つ邦楽が東京音楽学校の「科」となったのは昭和十一年であった。

本学音楽学部は、近代国家建設のための明治十二年の音楽取調掛創設という前例のない一歩に始まった。唱歌教材の作成や教師の養成とともに、数々の日本初演を行った。欧化政策の先陣を切る類例のない学校の歩みは、内外の荒波への前例なき挑戦の連続となった。国自体がそ

うであったから波瀾万丈の歴史をたどることは、最初から運命づけられていたとも言える。幾多の先人の尽力の賜である百三十五年は日本の近現代史とともにあった。これを継承し、二十一世紀の我が国と人類世界を視野に、前例のない挑戦を続ける伝統にこそ、音楽学部の本領が発揮されるのではなからうか。

取材や資料提供等で多くの方々にご協力いただきました。感謝申し上げます。

(はしもと・くみこ)総合芸術アーカイブ

センター特任助教・大学史史料室



草創期の東京音楽学校



明治23年5月に新築された当時の東京音楽学校の校舎